
cherry blossom

紅李 桃奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cherry blossom

【ノード】

N7286Q

【作者】

紅季 桃奈

【あらすじ】

作者の普段の日常を綴った詩のようなもの。
卒業の日を過ぎたら完結です。

「あはははっ…超ウケる…！」

つてよく言つてるけどさ

あつと、この田々は「ウケる」なんかじゃ表せないよ

友達と馬鹿なことしたり、好きな人と話したり…

他愛も無い日々だけど

それが一番私が望んでいることで

それが一番私を私らしくさせてくれて

それが一番私の大好きなこと…

だから

だつて私は

永遠に、卒業しなければいいのにつて思つの

卒業したらここを旅立たなきや駄目だから

皆とも…お別れ

もう後戻りは出来ない

そつ

もう変えられないんだ、この事実は

今日もいつものように学校に通つ

私は朝早めに来るから

友達と喋つたり、馬鹿なことしたり、恋バナしたり……

よく、ネタがつきないよねつて思つけど

毎日、毎日が楽しい

男子とも勿論絡む

好きな人を当て合つこしたり

はたまたは好きな人ことでからかわれたり

恥ずかしいよつで、結構楽しんでる自分がいる

でもね

私が一番絡みたいのはアイツ

私の後ろの席の……アイツ

授業中でも、絡みたいから^{わがわが} 態々^{たいわ} 後ろを向く

先生に注意されても気にしない

だつてアイツが笑ってくれるから

注意された私のことを

Mな訳じゃないよ?

アイツと絡みたいだけ

それをMつていつのかな?

まあどうでもいいナビが、アイツと絡めてんだから

……こしても、さつきから男子の目線キツいな

完全冷やかしてるでしょ、私のこと

バレンタイン一週間前だから、変な噂はやめて欲しいんだけどね

今年は…気持ち、伝えるんだから

私の、アイツに対する恋心を

……なんて言えないよなあ

男子にバラしたら絶対に言ふりすもん

……とにかく、変な噂だけは流さないでよね？絶対に！――！

……結局、聞いてないんだよねえ……

はあ……馬鹿なんだから

1 (後書き)

いかがでしたか？？

今日の気持ちを書いてみました。日記感覚？ w

楽しくて書いてこうと思ひますーー！

2 (前書き)

短い！！とにかく、短い！！

今日もいつものように学校に通つ
そしていつものように喋つて
いつものように男友子をからかい
いつものようにからかわれる
いつものようにからかわれる
だけど今日は少し違つた
今日は、私の友達が
両想いになつたのだ
友達の想い人に
「あんたの好きな人誰！？」
と問い合わせた
すると、意外とあつさつ言つた、その名前は
あの子の名前
あの子の名前
念の為、もう一度聞いてみた
そうしたら、やつぱり言つたのは

あの子の名前

何故か、私も嬉しがっていた

自分のことのように嬉しがっていた

飛び跳ねて、叫んで、祝福した

こんなにも、人のことで喜んだのってあつたっけ？

そう思った

“友達”だからだよね

きっと

ああ、なんて特別な存在なんだろう

“友達”って

私は、もう一人の友達と幸せの絶頂の君を羨望の眼差しで見つめていた

「ウチらも両想いになりたいなあ……」

と

バレンタインまでの日にちを指折り数える

1、2、3……

5。あと5日しか日いちが無い……

男子もバレンタインの話題はしているみたい

「今年は貰えねーだろーな」

とか

「お前は絶対 から貰えるだろー。」

とか。

勿論、私の名前もその話題に出でているだらう

だつて私はアイツにチョコを渡すから

想いを絶対に伝えるから

フラれても……構わない

想いを伝えられたことだけでも

私の一生の武勇伝として残るはずだから

だから

両想いは望まないよ

そりや、両想いになつたら嬉しいだらうけれどさ

今でも十分楽しいんだもん

友達関係のままで

同じクラスになつたことだけでも

それは限りなく奇跡に近いことだから

貴方に訊きたい

私は貴方に恋をした

それで私は綺麗になれたかな？

少しだけでも

…え？いや、違うよ

容姿が美しくなつたとかじやなくて

心

貴方に恋をしたこと

それだけで

女って綺麗になれるんじゃないかな

自分でじゃ分かんないけどさ

私は嬉しかったよ

毎日がきらきら輝いて

その思い出で心が彩られて

それで

心が綺麗になつたかな?つて訊いてるの

今日の放課後

担任から呼び出された

「話があるから、親友二人と来い」

だそうだ

何か疾しいことだな

野生の勘が、そう言つていた

思い当たることが無い訳ではなかつた

「絶対“のこと”だよ」

「どうする…？」

「正直に言おう」

不安な気持ちを抱えたまま迎えた放課後

疾しいこととは

やはり私達が予想していた“のこと”だった

私は結構な問題児だ

だから説教慣れしている

説教をするのは

隣のクラスの学年主任

私の尊敬できる先生の一人

私達の味方になつてくれる

しかし私達が悪事をすると

敵になる

私達はこう讀んでいた

“てきみかた
敵味方”

意味はそのまま

説教では最初の方は敵だ

しかし後に味方になつてくれる

親身になつて

卒業まであと少ししか無い

あと何回

“敵味方”の先生にお世話になるのだらう

出来れば少ない方が良いんだろうけど

でも

毎回説教を受けて

毎回味方になってくれる度に

目が潤んじゃうのだ

4 (後書き)

今日本当にあつたことと、
姫とアリスと説教受けた。
。

必死に作っている

クッキーに

想いを込める

そう

明日は対決の日

バレンタインデー

今年は例年に比べて

気合いの入れ方が半端ない

だって

貴方に想いを伝えるから

明日こそ伝えるから

好きなんだもん

貴方のこと

“好き”っていう気持ちを込めて

ラッピングする

そして、最後にマシュマロも入れる

知ってる？

クッキーには“好き”っていう意味があつて

マシュマロには“大好き”っていう意味があるんだって

私、不器用だけど

お菓子作り頑張ったんだから

貴方の為に

この想い

絶対に

伝える

6. (複数形)

今日…つまつばんシャインのいるで。

今日は対決の日

朝、いつもより早めに登校する

君に“私の気持ち”^{クッキー}を渡す為に

だけど教室には

からかう為に早めに登校した男子達がいた

その中には君もいて

今の状況では渡せないと確信した

その後も君と喋る機会はあつたが

喋るだけで

“私の気持ち”は渡せなかつた

しかし

時は来た

掃除時間の真っ最中

君は教室にいない

野次馬もない

ひとつそりと

君の机の中に“私の気持ち”を忍ばせる

どうか届きますように、と祈つて

君は机の中を見たら

驚いたような顔をしていたね

私は逃げた

このままじゃ心臓が保たない

そう思つた

教室に戻つたら

君はいつも通りふざけていた

少しだけ安心した

私は

君のことを少し避けながら

友達と喋つていた

大急ぎで家に帰った

ピアノだつてろくに弾けない

それはきっと

君を想つてゐるから

今頃君は

包みの中に入つた手紙を

読んでゐるのでしょうか

クッキーを

食べてくれてゐるのでしょうか

知りたいけれど

分からぬ

手紙の内容

“ 義理じやないから ”

ちょっと素つ氣なかつたかな

少し反省

もつもつと素直に書けば良かつたかな

でもそれが私の気持ち

私は口下手だし

文章も上手く書けないから

それぐらいしか思いつかなかつたよ

すゞく遠回しな書き方

ストレートに

“好き”って伝えたい

…君は分かつてくれたのかな

私の精一杯の

この気持ちを
恋心

6 (後書き)

2/14の活報も是非見てみてくださいね
今日のことが詳しく書いてありますから。

7 (前書き)

昨日の出来事です(汗
古い情報ですみません=――=

バレンタインに

君に“私の気持ち”を渡してから

一日が過ぎた

はっきりと

「学校に行きたくない…」そう思った

だって

冷やかされるかもしないじゃない

そんなのは絶対に避けたかった

私は

臆病だから

少し憂鬱な気分で歩いた通学路

前方に見えたのは

“君”の姿

思わず俯く

君に私はどう見えていたのでしょうか

きっと

すげーにビビリ屋だつて思つたんだろうね

たまにはビビリ屋になつたつて良いじゃない

時に恋は人を変えるんだから

でも

本当に

昨日の出来事は

今までの私を変えた

「おーい、テープ借りる~

「超ウケるー!」

普段から君は

笑顔で私にそう言つてくれる

それに私は笑顔で応える

なのに

今日せせんなことのことが

すげえ恥ずかしことに思えてきて

だけど

私の気持ちを知つても

態度を变えない君に

また惚れ惚れしちゃつたりして

前以上に

君のこと意識しちゃつてる

…男は知らないんだよね

バレンタインに

女がどれだけの不安と期待を胸に抱いて

臨んでいるのかってこと

それだけ色んなことを背負つて

この日の為に懸けてるの

だから

この気持ちは本物なの

7 (後書き)

あとでハ話も書くつもりです

今日もやつぱり

通学路を歩く足取りは重たかった

君に会いたいのに

会いたくてたまらないのに

心の中には

未だ羞恥心が蟠わだかまりとなつて残つている

教室には

結構仲のいい女子

スクールバッグからわざわざと荷物を取り出して

教室の後ろの女子の輪に加わる

話の内容は

案の定バレンタインのこと

世間で言つ

“恋バナ”というもの

ふと教室を見渡した

すぐそこにあったのは

君の机

置きっぱなしにされたリュック

わっと

登校してすぐに

友達とサッカーの練習に行つたのだろう

「ちやんと荷物取り出してからサッカーすれば良いのこ……」

そつと思いつつも

そんなにじるも愛おしく思えてくる

もつ一度君の机に視線を戻す

するとそこには

思いがけない事実があった

君のリュックにぶらさがっている

ゲームのキャラのマスコット

それは……

私がバレンタインに

クッキーと共にあげたもの

絶対に捨てられるだろう

だめもとで渡したのに

嬉しさと恥ずかしさ

両方が混ざったような不思議な感覚

私は

その間に女子が話していた内容なんて

全く耳に入らなかつた

8 (後書き)

今日、実際にあつたことです

学校に行くのが

慣れてきた

君とも普通に喋れるし

冷やかしてくるのは一部の奴だけだし

このまま

君との関係も

何のアクシデントも起きないまま

卒業を迎えるのだと思つていた

しかし

今日

衝撃的な出来事があつた

“私の気持ち”を渡しても

特に反応は無いことに

私はいつも想つていた

「君に女だつて思われてないから流されたの…？」と

はつきり言つて

私はどうやらかと嘆ひと

変なキャラだ

妄想はするし

ちょつとジズしてゐし

男っぽいし

そう思つてたのに

今日頗る言われた言葉

「チヨコ、ありがと」

一瞬、何を言われたのかが分からなくて

聞き返した

でも夢じゃなかつた

「チヨコ、ありがと」

確かに、そう言つてくれていたのだ

嬉しいの

嬉しいの

だけじゃなく恥ずかしくて

「ああ……うそ」

つて

言葉を濁したりやつたよ

…好きなのに、ね

本當はすぐくへ

嬉しかったのに

だけど

素直になれなくて

君の前だと調子狂つちゃうよ

他の男子に言はれてるのも

君に言えない

馬鹿なことも

君の前では

謹んでこるし

寝ても覚めても

君が頭に浮かび上がる

会えると嬉しくて

話せると飛び上がりそうなほど嬉しくて

君のせいで

私は変わってしまう

君はすぐ

ずるこ奴

ひと McConnell が

私を惑わせる

でも

変わりたい、と思う自分がいて

惑わせて欲しい、と思う自分がいる

君がそうしてくれるのなら

9 (後書き)

是非、活報も読んでみて下さいねッ

月曜日、つて
すいぐもどかしい
休日が終わってしまった
学校なんて面倒臭い
…なんて以前のこと
学校に行くのは面倒臭い
だけど
君に会えるから
学校に行くのが苦にならない
でも
何故だらつ
？
最近
君の存在が
すいぐ遠くに感じる

君にとって

私はただのクラスメイトでしか無いでしょ？

私にとって

君は特別な存在なの

休み時間

友達と移動する

君は

男子の輪の中心にいた

「私もあの中に入りたい……」

つて思つたけど

それは決して口に出れない

でも

何をしてるのかやつぱつ気になつて

ちりつと盗み見る

君は

オルガンを弾いていた

子供がするようなお遊びのよつなるものじやない

ちゃんと…美しいメロディーになつてゐる

弾く姿も

サマになつてゐるね

いつものふやけた君も良いけれど

今の君は

すくなく大人びたように見えるよ

鍵盤だけを見つめた瞳は

とても同じ年には見えなかつた

ヤバい

頬が熱い

私は慌てて教室を出た

私…かなり高揚してゐる

本当に

ひとつ

ひとつ

いつもと違う君を

見ていたかったんだけどね

10 (後書き)

文中に出てきた“友達”つて、姫のことだからね～？
おい、姫、見てる～？？w

遅くなりました！！

“君に逢いたい”

その気持ちだけが胸を渦巻く

もう

四日は君に逢っていない

今すぐにでも君に逢いたい

私にはもう時間が無いのに

神様つて意地悪

どうして

こんな大事な時期に

風邪を引かせたの？

一日中

閉ざされた部屋の中で過ごす

楽で良いかな、って思った

最初は

だけど

私には

どうしても時間が足りないの

この殻を破つて

君に逢いに行きたい

無邪気な笑顔を見せてよ

好き……

好き……

この気持ち止めようがなくつて

勝手に暴走してしまつ

自分で感情さえもコントロールできない

それほど君のことが好きなんだよ

頭の中も胸の内も

全て君に支配されている

私と君の距離が離れる日

ひつ

卒業式

その卒業式まで…

あと1-6日

そのうひ

君に逢えるのは

1-2日だけ

休みなんかいらない

君と一秒でも長く一緒にいたい

もつと…君を感じてみたい

特別喋つたりしなくても良い

遠くから君のその姿を見つめるだけで良い

その輝いている存在を

この田で確かめたい

それだけで良い

12日なんかじゃ足りない

もつべし

もつべしだけ

タイムコマットを延ばして

君が遠れかつてしまわぬよう

でもそれは

叶わぬ夢

1-1 (後書き)

あー……もつ本当にタイムリリジットが迫ってきて、憂鬱です……（涙）

今日は

学校に復帰

僅かな休日が終わつたが

希望の光は差していた

君に逢える

そう信じて学校へ向かう

しかし期待はあつたり裏切られた

君は欠席

折角学校に来たのに……

その思いばかりが胸を占領して

周りからも

「お前、アイツが来なくて寂しーんだろ！？」

と言われる

寂しいに決まってんじょん

当たり前……

だけど

その気持ちを押し殺して

普通に男子と絡む

そうしたら

ある男子が私に向かってぼつつ

「 IJの前のIJと、本当にだからね」

“ IJの前のIJと”

ああ、そうだ

IJの前の IJの男子に

「 うう、お前のIJと好きらしこよ」

って言われたんだ

相手にしてなかつたから、忘れてた

もし、そうだったら

どんなに嬉しいか

でも

そんなはずは無いから

そんなことを信じて

裏切られたら

普通に振られるより傷つくと思つから

だから信じてはいないけれど

「俺、アイツから相談受けたんだって

何か色々と理屈を並べ立てている男子

……そういうことは

本人から聞きたいの

君の口で

君の言葉で

君の表現で

言つて欲しい

第三者だと信用が低いから

もしも、からかうためだったら、とか

でもね

多少なりとも信じたいよ

良い結果を望む訳ではないけれど

悪い結果も望んでないから

少し…期待している自分がいたりする

13 (前書き)

昨日（3／4）の執筆中小説です（^—^；）

昨日は、時間が無くて投稿出来なかつたんですね。
。。

今でもまだ信じられない

私が

君と付き合えることになつただなんて……

時は

今日の六時間目の社会が始まる直前

君の友達が

小さな紙切れを私の机に置いた

「これ、アイツからだから」

そう、君からの手紙

何だらう……落書きかな？

そつ思いつつも、小さく折り畳まれた紙を開く

そこには思いがけないことが書かれていた

『好きです。付き合つてやれ。返事下さい。』

君の筆跡だった

君がいる方を見てみると

目が合ってしまった

しかしそうすぐに逸らされてしまった

…おかしい…

明らかにいつもの君じゃない

そわそわしながら授業を終えた

君に話し掛けよう、と決心したけれど

君はわざとらしく友達と何処かへ行ってしまった

この抑えきれない何かを

私は親友に話すべきだと考えた

親友を呼び出して、状況を話す

さすがは親友

「返事したげなよ！」

と私を後押ししてくれた

…だけ

私は素直に喜べていなかつた

これは騙し告白かもしけないのだ

もしそうだったら

馬鹿みたいだらう

なかなか決心がつかない

でも

そこを後押ししてくれるのが

親友の良い所

私の気持ちの整理もついた

可愛いメモ帳を用意する

そして

私が伝えたい想いを書き連ねていく

だが書くだけでは駄目

渡さなくてはならない

私は机に放置する予定だったのだが

親友に連行され

友達とふざけている君のもとへ

先程の手紙を君に握らせる

君は少しだけ嬉しそうな顔をしていた

私は耐えきれずに自分の席へ逃げた

スクールバッグに突っ伏する

そのまま終わり

皆が教室を出て行つた

慌てて私も鞄を持つ

すると親友がひと言

「読み終わつたあと、『嬉しい?』って訊いたら、はにかみ笑顔で頷いてたよ」

そう言つて、教室を出て行つた

…騙し告白じや、無かつたんだ

そう安堵した

そして私も教室を出た

今までの出来事は

全て今日の為だったんだ

両想い、つて

こんな気持ちなんだ

自然と顔がにやけてしまつ

胸を占領する君への想い

「好き」

君も今頃

こんな甘酸っぱい気持ちなのかな

そんな妄想も

今はこの気持ちを鮮やかに彩る

……ねえ

卒業まで

よろしくね

大好きだよ……？

13 (後書き)

やばー、嬉しかーるな……。

活報にも、このことが書いてあります。良ければ見てみて下さい
このことで短編も書く予定です！

君と面識ないになつてから

初めての顔合わせ

期待はあつさり

破られた

男友達が

私と君のことを冷やかす

でも直接冷やかすわけではない

私たちと少し距離を取つて

冷やかすの言葉が聞こえるか聞こえないかのぎつぎつの話で

冷やかすのだ

「桃奈の夫は、T～！」

T、とは君のこと

桃奈は……私だ

言つてゐ奴^らは

分からぬだらけ

軽くふざけて言つてゐるやうの言葉が

私と君の距離を

どことか遠ざけてこつてゐる」とい

田^だが合つても

逸^{いつ}りやれる

普段^{ふだん}だつたら

近くにいたら君から話^{はな}かけてくれるの

話^{はな}してくれなくて

でも意識^{おも}して合つて

そんな微妙^{なまめう}な関係

ヤダよ…

こんなに生温^{なまぬ}い関係になるんだつたら

画思^{かず}いにならなければ良かつた

そんな勿体無い」とまで

考えてしまつ

両思いになれるなんて

私の永遠の夢だったのに

その夢が叶つた途端

捨てたいと思つぱつになるなんて

決めたじやない

今を思つたり楽しむ、つて

なのに

なのに…

どうして……？

私は

友達のカップルみたいに

第三者も交えてだけ、『トーントして

学校でも、恥じらい「ことなく堂々として

プリ撮つたりして

そういうこと、やってみたい

私たちも、いつか、そんなこと出来るのかな?

でも「いつか」っていつ?

私には時間が無いんだよ?

もう逢えなくなるかもしねないんだよ?

君にこう伝えたいのに

伝えられない

君が、二日前に手紙に書いてくれたじゃない

「好き」だって

私も、書いたの

「好き」だって

私が「好き」なんて言ったの

初めてだったよ?

最初は友達から言つてもうつて

次のバレンタインは

相手はしたけれど

「義理じゃないから」で

「好き」なんてひと言も書いてない

だけど

初めて言つたんだよ

君に對して

初めて言つた

「好き」だつて

君への気持ちは冷めることは無い

私は君のこと「好き」じゃないよ

「大好き」だよ

相手はどうなんだろう

私のこと

「好き」…なんでしょう？

そう信じて良いんだよね？

「好き」ならば

私が時間が足りないってこと

分かつて欲しい

今日

君の友達に

私が引っ越しさると、いつの事実をバラされてしまった

相手は… そう、勿論、君

美術の時間にそのことを知らされて

私は撃沈していた

だつて

自分で言ひ込んだ、つて決めてたのに
でも恥ずかしいから

結局は感謝した方が良かつたのかな?

君は

美術の時間

窓際でサボっていた

いつもなら男子と集つているのに

その時は一人で

魂が抜けたみたいな感じだつた

そんな調子のまま下校時刻を迎えた

私はいつも

少し遅めに学校から出でている

それに対して

君はいつも猛スピードで教室を出る

でも今日は違つた

何か探し物をしていたみたいで

ほんの少しだけ

君は教室に残つていた

こんなこと

好きになつてから初めての出来事

私は

最後まで君の姿を田に焼き付けていた

探し物が終わつたらしく

教室を出て行つたとする

教室の後方の扉から君は出よつとした

その時

私は見てしまつたんだ

田を「じじ」と擦る君の姿を

私は視力が悪いから

見間違いかもしれない

でも

私には

君が泣いていたように見えた

私は

君のことが心配になつて

気になつて

廊下を歩く君を

田で追っていた

丁度君が

教室の前方の扉の所を通った時

君が私の方を振り向いた

私はずっと君のことを見ていたから

勿論目が合った

その時

君はどんな表情カオをしていたと思つ?

私の見たことの無い表情だつた

切なげで

凄く哀しそうで

もつ今にも泣いちゃいそう

いつも輝きが宿っている瞳は

弱々しくて

いつもの君じゃないみたい

私の思い込みかもしねない

気にし過ぎかもしねない

でも

もし君が

私の引っ越しのことを聞いて

そんな表情をしているのなら

それは

私のことが好きだって

受け止めても良いの?

…血意識過剰?

…そこまでの意識を持つてないと

自分を失いそうになるの

私のせい

君がそんな力オしてるんだって

自分を責めたくなる

私が君と繋がつてられるのは

君のリュックにこいつこるマスクと

私のポケットにこいつも入つてこるマスクと

それがお揃いだつてことだけ

だけ

ポケットにあるマスクと握るだけで

君と繋がつてられるような

そんな気がする

私と君は

まだ直接関わらないまま

君は

私の口

好きでいてくれてる、って

私は信じたい

君は

私は何も言わないけど

私の友達には

本音をぶつけてるんだね

恥ずかしいんだもううなづき

私は

君ともうと近付きたいや

君ともうとふざけたいよ

君ともうとふざけたいよ

……なんてこと言つても

私の方から

君を避けてるもの

事実と言えば事実

私だつて

君の友達には

君のことを相談したり

君の情報を色々教えてもらつたりしている

お互い様か…

私つてわがままだよね

君には

「本音を言つて欲しい」

つて思つてゐるこ

実際には私が

君が近付いてきても

逆に離れていくてる

馬鹿

アホ

馬鹿

アホ

自分が馬鹿でアホで

そんな人間に思える

折角夢が叶つたって言ひのひにさ

でも君もわざと思つてゐるのかな

お互い様だよね

変な遠慮したやつてゐるんだよね

時間が無いのは

誰よりも

君と私が一番知つてゐることなのに

つまり

君も馬鹿でアホってこと?

…いや、君のことは悪く言いたくない

私が馬鹿でアホなんだよ

うん、あいつとやつ

馬鹿でアホで

ついでにわがままだな

こんな私に

嫌気がさす

だから私は

物にあたる

壁を蹴り飛ばしちゃつたり

机を思いつきり拳で叩いたり

でもそれで

私の心が晴れることはない

…ねえ

私の親友がね

「桃奈が引っ越す前に、俺、何か出来ることあるかな」

それを君が言つてたつて教えてくれた

何かしてくれるので?

なら

君と普通に喋れるようにしてください

馬鹿でアホでわがままな、私の心が晴れるには

そうしてもらいたいんです

馬鹿でアホでわがままな、私が君に対して言つた

最初で最後のお願いです

昨日の執筆中小説です……！
すみません（――）ま 停電停電、つて騒がれてたので、慌て
てやじやめちやつたんです。

今日はホワイトデー

私はほんの少しの期待と

沢山の不安を抱えて

登校した

教室には

君と、君の友達と

私

… おいおい、女子、私一人だけかよ……

喋る相手もいない

無言のまま教科書を机の中に入れる

その時

教科書が

何かにつつかえる感じがした

そして聞こえる

“ガサツ”という音

私は、机の中を覗いてみた

そこにあつたのは

青い袋

ねむか

君からの……お返し?

私は

今すぐにでもその袋を開けて

中奥を確かめたか二
た

た
け
と

教室は男子たちに

しかも妙に視線を感じる

あー、反応を見て楽しんでる感じですか

君は

わざとひじへ塾の宿題やつてるけどね

私はその青い袋に

気づかぬフリをした

そして

親友の一人も、美術の時間にお返しを貰った

「中身、見ようよ」

そう言って、渡り廊下に直行

初めて中身を見る

そこには

焼き菓子らしきものと

細長い…箱？

その箱はしつかり包装されていて

学校で開けることは危険だと思った

私は家で開けることにした

停電があるから、と午前授業になり

わざと早めに家に着いた

自分の部屋に直行

そして扉を閉め切つた

そおっと包装を開けてみる

中身は

ピンクのイヤホンだつた

嬉しくて嬉しくて堪らなくて

叫びたい気分だつた

だけど親がいる

やつとの所でその衝動を抑えた

イヤホンを取り出してみる

私の大好きなピンク色のイヤホン

… つか、何でイヤホン？

そう考えた時、思い当たる節があつた

そういえば、以前

「誕生日に♪P o d n a n o置つてもうつたんだだけじゃー、イヤホンは付属の奴のままなんだよねー。欲しいんだけどねー」とか

「ウチ、色だつたら断然ピンクが好きー！」

と言つたような記憶が微かにある

…覚えててくれたんだ

私がそう言つたことも

私がピンクが好きだつてことでも

覚えててくれたんだ

そう思つと

君が凄く凄く

愛しく思えた

前よりも

もっともっと

君のことを好きになつた

「大好き」だよ

離れることになってしまっても

明日は卒業式

早いな、って本当に実感する

大切な親友と

ちょっと照れるけど

大切な彼氏とも

お別れなんだ……

そう思うだけで

涙が出そう

でも

やるべがいとは全てやった

そう思つてる

親友といつぱい遊んで、喋つて

そして君に告白して

それで恋にになつて

デートの約束もすることが出来た

何一つ悔いは無い

だけど

やつぱり

引っ越してしまつ自分を

今まで……いや、今も

ずっと責めている

良い親友と出会えた

好きな人も出来て

最高の思い出も出来た

これで……良いんだよね

私の中から最高の思い出は消えることは無いんだから

だから私は

泣かない

涙なんか流さない

だって

泣こちやつたら

本当に

もう一度と会えなくなる

サヨナラになるみたいだもん

私はまた

親友に、君に

会いに行きたいんだもん

だから泣かないよ

いいで泣いたら

女が^{すた}廃^{する}

私は泣かない

絶対に泣かない

たとえ

蜃氣楼のような儚い思い出でも

私の中で消えることは

まず有り得ないでしょう

私は確信した

思い出は私の中に一生涯残るから

泣く必要など無い、と

今日は

一年を締めくくる“卒業式”だった

朝学校に来たら

皆がフォーマルな感じになつていて

お互に「可愛い～？」と褒め合つたりした

やけにテンション高いよね、私

あつと

今自分に直面している“卒業”といつ現実から

忘れよつとしてるんだ

そして卒業式が始まつた

歌や、呼びかけ……

練習通り……いや、練習以上に上手く出来た気がする

涙は出なかつた

「サミシイ」っていう気持ちを

押し殺す方に必死だつた

皆

一年前より大人になつてゐる気がした

君も

親友も

友達も

クラスメイトも

皆、皆、皆

大人になつてゐた気がした

式が終わつたら

思い出を残すこと全神経を集中させた

卒業アルバムに寄せ書きをしたりね

キヤーキヤー言いながらやつたつけ

君のアルバムにもメッセージ書いた

君の方から、「アルバムに書いて」って言つてくれたから

凄く嬉しかつたつけ

「ダイスキ」っていう素直な気持ちは書かなかつたけど

「君と同じクラスになれて楽しかつた」っていうことは書けた

写真も撮つた

男女八人くらいで集まつて

そして撮つた

君は私の隣にいた

君の横顔はどこか寂しげで

私もふと切なくなつた

デートの詳細も決めた

何でか分かんないけど

普段の時より

気兼ねなく、恥ずかしがらずに話せた気がする

デートの話とか

いつもなら手紙じゃなきゃ絶対無理だつたけど

普通に皆の前で言つちゃつたし

君も普段より恥ずかしがつてない感じだつた

親友と遊びにも行つた

地元のイオンで集まつて

プリ撮つたり

アイス食べたり

ショップ見たり

停電で閉まつてるかとヒヤヒヤしたけど

日頃の行いは悪いのに、運は良いみたいだ

昨日は閉まつていたのに、今日はけやんと営業していた

親友一人の他に

偶然来ていた友達二人とも一緒に遊んで

決して特別なことでは無いのだけれど

凄く思い出しなった

今年の春は

桜を見ることは出来なかった

でも良いこと

私の心は

私の思い出は

私の「」の一瞬は

桜色に染まっている

“cherry blossom”終了において

この作品に書いたこと

それは全て私の実話

私の今までの人生の中では

ここに書いたことはほんの一部にしか過ぎないのだけれど

私には凄く大きなものに感じる

色々なことがあった

引っ越しが決まって

親友が両思いになつて

先生に叱られて

恋バナもして

バレンタインに告白して

両思いになつて

そして

卒業して

凄く

一つ一つが濃く感じた

何一つ悔いは無い

「ありがとう」

その気持ちでいっぱい

親友に

「ありがとう」

君に

「ありがとう」

友達に

「ありがとう」

これを読んでくれた方にも

「ありがとう」

そして、今まで私を支えてくれた全ての人々に……

「ありがとう」

はい、遂に完結です！
早いな～（・・・・・）

つていうか、これ書いて、凄く楽しかったです
「あ、今田こんなことあった～？ 書こ？」みたいな
ww

それでは、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286q/>

cherry blossom

2011年3月23日13時23分発行